

古環境変動とアンデスにおけるモニュメントのはじまり

キーワード[アンデス文明史、環境、資源利用、物質と記憶、学際性]

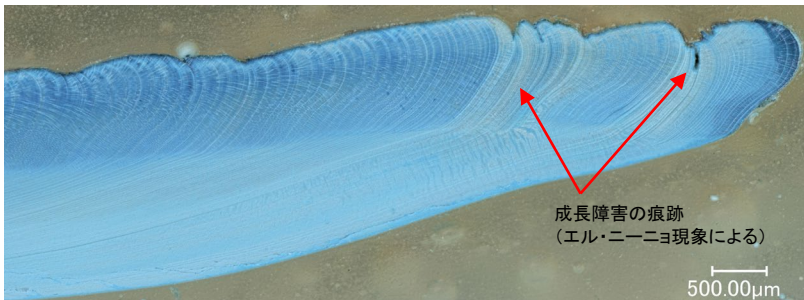
講師 莊司 一步



発掘調査によって、土に埋もれたモニュメント建築の壁が出土したところ。崩れたり埋もれた建築がどのような構造でつくられていたのかを明らかにする。



海を眺めながら発掘調査をしている様子。遺跡は海に突き出した小高い丘の上に位置していた。遺跡からは動物の骨や貝殻、石器などの人間の残した痕跡が見つかる。



成長障害の痕跡
(エル・ニーニョ現象による)

500.00 μm

遺跡から出土した貝殻の断面の顕微鏡写真(染色済)。年輪のような縞模様をつくり成長する貝殻を分析し、成長パターンの変化や化学組成から過去の環境を復元する。

内容:

マチュピチュ遺跡やナスカの地上絵で有名なアンデス文明ですが、インカ帝国が栄える紀元後1500年よりもはるか以前からユニークな文化と社会を育んできた長い歴史のうえに成り立っています。私は、そうしたアンデスにおいて人々が集まり、大きく複雑な社会を築き始めた紀元前5000年頃から紀元前3000年頃までの時期を対象として、なぜ人類はモニュメントをつくるのか、どのようにしてモニュメントは作られ始めるのか、モニュメントの建設を通じてどのような社会を人類は築いてきたのかというテーマで研究を続けています。アンデス文明史の中でもモニュメントがいち早くつくられ始める沿岸地域の考古遺跡を発掘調査し、海産資源や植物資源をうまく利用しながら定住性を高めてきた漁撈民集団と古環境変動のかかわり、そしてモニュメントの創出過程を考古学、文化人類学、生態学、地球化学、古環境学の学際的な研究手法で明らかにします。

アピールポイント:

多様な学問領域の交差点としての考古学の強みを活かし、広い知識と深い専門性をもって、人類史の解明に挑んでいます。数千年前のアンデスという遠い他者から、現代社会を見つめ直しています。

分野: 文化人類学、考古学、古環境学
専門: アンデス考古学、環境と人の相互作用

E-mail : kshoji [at] human.yamagata-u.ac.jp

Tel :

Fax :

HP :

